



「90キロはさすがにかすりもせんかった！！」と運転中の私の隣でふとつぶやく。すぐに私もハッとして『さてはバッティングセンターに行ったな』とピンときて「ええかげんにせんと腰いためるヨ！！」となだめる。今年70歳になった宮本さんとの車中の会話である。今でも極板洗いをバリバリこなし、車の中ではいねむりしている以外はずっとしゃべりっぱなし。要するにムチャクチャ元気で、70歳になっても遺伝子がピチピチと飛び跳ねているようなイメージを宮本さんから受けるのである。

福沢諭吉先生が【鄙事多能(ひじたのう)】という言葉が使われていて、どういう意味かと言うと普通の人たちが雑事と片付ける細々とした事、例えば朝起きたら自分で布団をたたむ、雨が降ったら雨戸を閉める、ちょっと家の前を掃くなどなど、そういった身近な雑事に対していつも多能で器用でなければいけないという事で、芥川龍之介も『人生は瑣事に苦しみ瑣事を楽しまなければいけない』と言っている。そういった観点から宮本さんを見たとき、仕事から帰ってから、水筒に入れるお茶を沸かす水を汲みに額田の山奥に入っていくたり、休みの日には雨どいを直したり、屋根瓦の修繕を試みたり、少し風邪気味と感じたら御前崎へ潮風にあたりに行ったり、スーパーで酒粕とシャケの身を買ってきて弁当のおかずを試みたり、etc.etc.....。まことに【鄙事多能】そのものなのである。

テクアに来る前は大手工場で3交替制の仕事をこなし、その合間に加藤鉄工さんでアルバイトに精を出すなど、寝る間を惜しんで常に働きつづけた人であり、

「休みの日に一度も子供を遊びに連れて行ったことがなかったなあ」

とよくため息まじりに口にする。しかし娘さんは4ヶ国語に堪能で、有名企業の社長秘書を務め、今は外務省のエリートキャリアの旦那さんと結婚してヨーロッパの某国大使館に勤務している才女である。娘さんはたぶん、常にいっぱいいっぱいまで仕事に打ち込み、疲れきってポロポロになって帰ってきた父の背中を見て育ったのだと思う。人として一番大切なものを父親の背中から感じ取って育ったのだと思う。

『いま自分の背中は息子に、娘にどう映っているのだろう。』自分も含めて再考の余地がある人もいるかもしれない。自分もいつかはそのような「背中で語れる父親」に、そして「背中で引っ張れる社長」になりたい。宮本さんは私の師である。

羽原 篤史

